

行政視察報告書

| | | |
|-------------------|-----------|------------------------------|
| 経済地域委員会 行政視察 | | 平成30年7月25日（水）～7月27日（金） |
| 視察先 及び 調査事項 | 唐津市 | 九州オルレ唐津コースについて |
| | 九州観光推進機構 | 九州オルレ推進事業について |
| | 屋久島町 | 屋久島の自然環境を活かした観光振興の取り組みについて |
| | 屋久島環境文化財団 | 屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について |

1 唐津市、九州オルレ唐津コースについて

旧鎮西町（人口5,573人）は、合併により唐津市となったが、当時から1,800人減少している過疎地区。高齢化率36%。農業・漁業・観光が主な産業である。葉タバコ、畜産、イカ、アワビ、サザエ、資源減少気味。玄界灘国定公園内に位置して、唐津市全体では年60～70万人の観光客がある。

オルレとは、韓国語の「家に帰る道」、「家に続く細い道」などの意味があり、韓国国内で人気の高い済州島でのオルレの取り組みを、平成22年観光客誘致のため「九州観光推進機構」が取り組み始めた。10～15キロのコース設定で2～5時間の滞在時間の中で歩けるよう、舗装道路を避けてコース設定し九州観光推進機構の認可に続き済州オルレの認可を受け、コースとして登録される。

旧鎮西町には、豊臣秀吉の朝鮮出兵本拠地としての名護屋城址、各地大名の陣屋跡が120か所ある。当時は20万人の人で溢れていたそうである。小笠原貞政の陣屋跡もある。平成5年から史跡保存が始まる。内23か所が国の特別史跡指定を受ける。自然歴史文化の融合地。平成25年「九州オルレ唐津コース」が誕生。

道州制が囁かれたころ、九州はひとつだとして、「九州観光推進機構」が組織され、ここが「九州オルレ認定地域協議会」の事務局を担っている。現在、九州全土で21のオルレコースがあり、名所・旧跡・景観、自然などコースごとの特徴があり、全コースを制覇する者も現れている。

「唐津コース」では、前田利家陣屋跡を出発点として、筑前名護屋城跡や数か所の武将陣屋跡をめぐり、唐津焼窯元や集落内を経てゴールの波戸岬までの11.5キロのコース設定。立ち寄り所も設けてお茶が飲める場所もあり、ゴールではサザエのつぼ焼きが食べられる。

ゴールに車を置き、路線バスで出発点に移動。順路表示もなされている。

地域住民に委託料制で遊歩道管理を行っているほか、市職員も管理をしている。

月1回テーマ設定をして開催する「定例ウォーク」（定員40名）と年2回「九州オルレフェア」（定員200名）のイベント開催には韓国からの参加者も多い。

イベント時には参加費聴収し、保険、弁当、菓子などに充てている。スタンプ数から年間2,700名程がコースを巡り一人当たり2,000円前後の消費があるとみている。しかし、宿泊には結びつき難く唐津市のこの事業への予算は460万円ほどであることから、経済効果が高いとまで言いきれないが、韓国との交流が進展していることと、歴史背景の複雑な地でこのような事が行われていることに感動した。

松本市の公民館事業でも、テーマを決めてウォークラリーを行っているが、他地区を知ることができるような広範囲な交流ウォークなどが行われると面白かもしれません。

2 九州観光推進機構、九州オルレ推進事業について

平成15年「九州戦略会議」を設立。（九州地方知事会、九州経済連合会、など）

九州はひとつ、官民一体で具体的な背策を検討し、実践的に取り組むとしている。

平成16年「九州観光推進機構」を、「九州はひとつ、官民共同の常設組織」として設立。第一期観光戦略策定。

平成25年には観光産業を九州の基幹産業とする10年間の取り組みとして、第二期観光戦略を策定。同年、二年間の「第一次アクションプラン」策定。ほぼ同時期に信用力の強化、組織としての責任の明確化を図るため「一般社団法人九州観光推進機構」設立。

平成28年には「第二次アクションプラン」策定。翌年平成25年の目標値を上方修正。

第一期の成果として、九州観光の魅力向上、海外からの誘客拡大、国内大都市圏からの誘客拡大、有事への一体的対応をあげている。

第二期では、九州での自動車産業が4兆円規模であるから、観光産業も同水準にしようとして、「九州ブランドイメージ戦略、観光インフラ戦略、九州への来訪促進戦略、来訪者の滞在、消費促進戦略」を掲げている。

平成24年の観光消費額は2.2兆円であるが、29年には2.7兆円となり宿泊者数4,470万人であり、外国人訪問者数とともに伸びていて、最終目標の観光消費4兆円、宿泊者数6,800万人に向かっている。

以前にも書いたように道州制が囁かれたことにより、九州はひとつとして、初めて九州が一体となり取り組んできた事業である。九州観光推進機構には37名の職員がいるが、そのうち27名が九州各地・各社からの出向である。

九州オルレについては、韓国版トレッキングまたはウォーキングと理解していいと思うが、前段紹介した「家に帰る細い道」という意味で済州島への観光客年間700万人のうちオルレへの参加者が25%程度で、若年から高齢まで幅広く韓国内や外国に人気が高い。

平成21年九州観光推進機構の事業の一つであり、九州への興味を喚起する取り組みとして、「九州オルレ」を立ち上げ「社団法人済州オルレ」との業務提携を行った。

平成22年には、4コースを認定。現在九州各地に21コースある。

大事なことは、自然道であること、安全であること（風雨に左右されない）、テーマ性があり変化のある事とされている。

楽しみながらゆっくり歩けることが認定の基準となるようです。

九州オルレには平成22年から29年までの5年間に297,430名が参加していて、約6割が韓国からの訪問者となっている。

この取り組みによって、今まで観光地として認識されなかった地域でも観光資源開拓がなされて、いろんなどころに観光客が来るようになった。

また、一度に多くの人に来るという事ではないので、コースとなった地域での疲弊という事が無い。

「トイレを提供。無人駅に観光案内所ができた。小学校跡地を利用し地元野菜レストランができた。韓国との民間交流が盛んになり、料理の講習会を双方で開催。」

コースのある地域ごとに合同の取り組みができ、一日に2コース以上歩く者もいる。

それぞれのコースにテーマがあり、温泉、溪谷、史跡、景勝地、小集落など、各地の魅力の発信や国際交流、宿泊にもつながり素晴らしいと感じた。

スタートとゴール、途中でリタイアなどへの対応を考え、地元の協力は欠かせないし、コースの維持管理を想定してのコースづくりには大変な努力があったと思われる。

3 屋久町 屋久島の自然環境を活かした観光振興の取り組みについて

平成5年世界自然遺産に登録。円形円錐状の島で年間降水量は平地3,000ミリ山岳地帯10,000ミリで1か月に35日雨が降ると言われている。面積504km²周囲132km海拔0mから最高峰宮之浦岳1,936mまでの標高があり、九州最高峰から8位までここに位置することから洋上のアルプスともいわれている、植生の垂直分布が見られる特徴的な島である。

推定樹齢7,200年の縄文杉が観光の中心で、山岳へ観光客、登山客が集中しているため、登山道の荒廃やトイレの処理問題が大きな課題。観光の分散化と登山道整備を進め、豊かな自然を残したいとしている。

平成19年40万人が最高の入込で平成25年には30万人と入込客は減少気味である。飛行機（鹿児島、福岡、大阪）、高速船、大型船などが交通手段である。

世界遺産地域は島の21%、自然景観、生態系が評価された。

(昭和29年特別天然記念物役品スギ原生林指定。昭和50年屋久島自然環境保全地域指定。平成4年森林生態系保護地域指定。平成24年屋久島国立公園指定。)

入込客は、夏に増加冬に減少。比較的若い世代が多く、9割以上が鹿児島県外で関東4割。フリー8割、友人知人の組み合わせが多い。2泊が約5割でリピート率は高くない。住人への影響は、知名度が上がり観光振興されていることやU・Iターンが多く活気があると感じて満足感も高いが、一方では、自然破壊やごみ処理の問題と観光業者以外には恩恵が少ないこととレンタカーによる事故の増加など悪影響を感じている住民も多い。

最大の課題は、山岳部での駐車場不足から路上駐車が多いこと、トイレ利用環境の悪化、救急活動の増加。縄文杉コースの混雑に対応ができず、木道の設置・梯子の設置などにより、本来の登山道が姿を変えてしまい岳参りの信仰の山として道を壊してしまっている。昭和30~40年代に設置したトイレのし尿は人力で搬出しており、搬出作業が追い付かずポリバケツで保存している状況、携帯トイレの使用を呼び掛けているが効果が無いことなど、登山客には歓迎するものの自然の維持には登山客にも協力してもらわなくてははいけません。このままでは一日の入山規制にも繋がっていくような気がします。

屋久島・口永良部島生物圏保存地域としてユネスコパーク登録がなされ、「火の島と水の島。黒潮がつなぐ自然と人のエコパーク」が誕生したが、このことによる制約はない

ここでは、ガイドを公認制として「町独自の資格」として公認ガイド認定を行い安全制に配慮している。

また、屋久島に来た方に山岳部保全協力金を任意で徴収しており「日帰り1,000円、山中での宿泊2,000円」収納率70%で6,000万円となるが全額し尿処理のための人件費となっている。

登山道とトイレ問題は、岳都松本でも同じである。

国の機関の縦割りによって問題解決の道が見えないのではないかと感じた。

4 屋久島環境文化財団 屋久島環境文化村構想推進事業（里めぐり推進事業）について

屋久島環境文化村センターで島の大まかな地形的概要を聞いてから講義を受けた。

森林率90%、標高の高い山を奥岳、低い山を前岳と呼んでいる。

ウミガメの産卵地があり、観光資源になっている。

「屋久島環境文化村構想」屋久島特有の生活文化（環境文化と呼ぶ）を学習や研究に

よって価値を見直し自然環境の保全を図り、自然と人が共生する個性的な地域づくりの推進のため、平成5年3月に屋久島環境文化財団設立（鹿児島県、旧屋久町、旧上屋久町）。

平成5年12月に自然遺産登録され、この構想を推進するために「屋久島環境文化センター」と「屋久島環境文化研修センター」の管理委託を県から受託してきている。委託料、寄付などで運営している。環境への学習や保全活動への支援、地域づくり、国際交流などの事業と合わせ「里めぐり事業」を行っている。

平成23年「屋久島里めぐり推進協議会（集落、屋久島町、屋久島環境文化財団）」を設立。屋久島を訪れる方々に地元の歴史、産業、文化、自然などの集落の自慢を語り部のガイドによって案内をする。

屋久島には26の集落があるが、平家の落人が最初に上陸したという集落を含めて、現在7集落で受け入れていて、参加料1,500円、保険を除き1,300円が集落の収益。3日前から前日までの間の予約制で行っている。2～3時間の行程で現地集合現地解散としていて、交通機関の待ち時間などを利用する観光客が多く、25年度には282人、29年度には787人と参加者は上昇している。

食事つきプランや収穫体験、サバ節工場見学など集落ごとの特徴がある。

屋久島町は人口12,000人である。高校が無いため卒業後町を出ていくがIターンがあり、人口は横ばいとなっている。

屋久島の魅力ゆえの事業であるのか、案外どこでもできそうな取り組みだとも思えるので、研究の価値があると思った。

平成30年7月30日

松本市議会議長 上條俊道 様

経済地域委員会委員 柿澤 潔